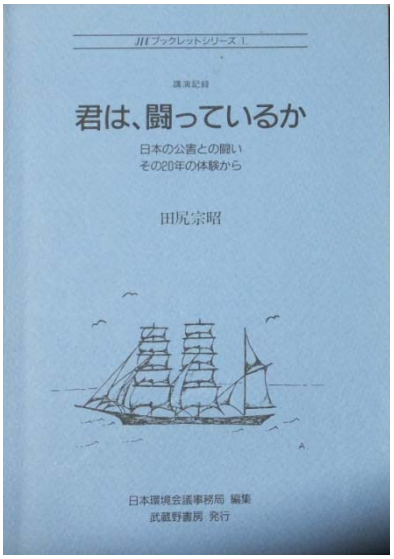
田尻宗昭『君は、闘っているか』読む



田尻宗昭先生は先に紹介した『海と乱開発』のほか、岩波新書から『四日市 死の海と闘う』『公害摘発最前線』など多くの著書を出版されている。

表題と写真にあるブックレットは、「日本の公害との闘い その 20 年の体験から」という副題がついた、1992 年 7 月に武蔵野書房から刊行されたものである。田尻先生は 1990 年に 62 歳の若さで亡くなったが、本書は 1987 年に一橋大学経済学部で行った「特別講義」を記録したものである。担当の寺西俊一先生によれば、先生の「話の終わり頃には、ほとんどすべての学生諸君-の目が、心を大きく揺さぶられた感動の涙でうるんでいた」という。

20 数年前、このブックレットに大いに感動したことを覚えている。今回『公害・環境研究のパイオニアたち』を読んで、久しぶりに再読した。一橋の学生諸君と同じく、あらためて感動の涙で目がうるんだ。この感動を伝えるのは難しいが、講義の「おわりに」の一部だけでも書き移しておきたい。

「私は、20 年間、公害とつきあってきました。一人の海の男が、何も知らないで、公害の現場からいろんなことを教えてもらいました。しかし実感としては、暗いトンネルの中を懐中電灯を持たずに、手探りで、何の展望も持たずに歩み続けたんだなあ、という感じがします。そしてようやく、少し出口が見えるようになってきたような気がします。それは一体なんだろうか。それは、いろんな現場で手に入れた人間の絆です。」

「私は、つい心が崩れそうになるとき、いつも四日市の海を思い出すんです。四日市の海は、私にとって偉大なる牧師です。一人の海の河童、船乗りに、この国の社会の矛盾を教え、そして、その激流の中で生きる人間の生き方を教えてくれました。その意味では、私にとっての素晴らしい教師は四日市である。海である。そして、漁民である。」

「この 20 年間の歩みの中で、私がいつも考えることは、実は何の展望もなかったということです。おそらく皆さんも、これからの長い人生の中で、何度か、崖っぷちに立たされるだろうと思います。その千尋の谷を迎えた時に、どう考えても、その方向が正しいと思うならば、どうか目をつぶって一歩踏み出してほしい。その一歩が、必ず皆さんを救うことがある。人間の小さな頭では計算できない、数字を超えたエネルギーとドラマを生むことがある。最後に、この一言を皆さんにプレゼントして、今日のお話を終わりたいと思います(拍手)。」

(2014 年 9 月 28 日)